

もくじ

新収蔵資料紹介 藤井幼稚園のあゆみ… P1 村越向栄と遠藤清子… P3
足立歴史地理案内③ 溜井一川をつかった平地のダム… P4

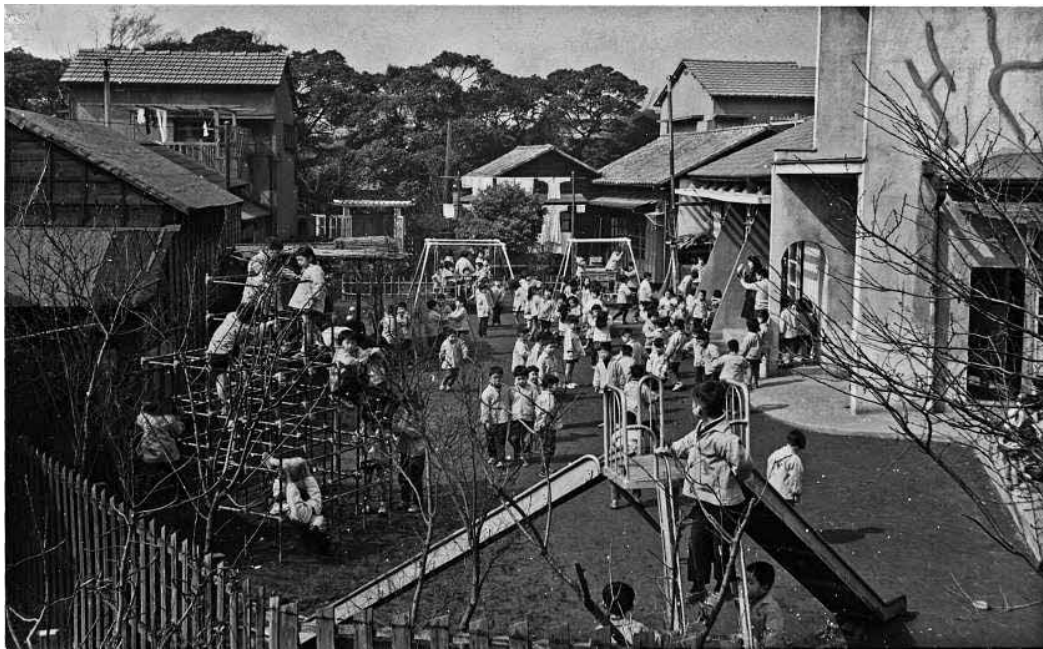


写真1 在りし日の藤井幼稚園 昭和36年(1961)3月2日 山崎勝久氏寄贈

新収蔵資料紹介 藤井幼稚園のあゆみ

問所 瑛史

足立史談

第681号

2024年11月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

千住五丁目にあった藤井幼稚園は昭和二十八(一九五三)年から平成八(一九九六)年まで四十三年間経営されてきました。令和五年(二〇二三)の園舎解体にあたり、幼稚園に関する資料を、ご親族の山崎勝久氏よりご寄贈いただきました。この資料から、藤井幼稚園の歴史について紹介します。

寄贈された資料は大別すると幼稚園に関するものと経営者であった藤井家に関するものに分かれ、幼稚園に関する資料はさらに①幼稚園の設置に関するもの、②園舎の増築に関するもの、③園の経営に関するものの三つに分かれます。

■藤井幼稚園の歴史 藤井幼稚園は藤井伸一氏(一八九二～一九六五)によって設置申請がおこなわれ、昭和二十七(一九五二)年に認可がおり、翌二十八年に落成式がおこなわれました。園長の伸一氏は千寿第二小学校や本木小学校で校長を勤めた人物です。

開園時期は全国的に幼稚園への入園希望者が増加し、幼稚園が増えた時期でした。昭和二十六(一九五一)年に文部省は全国の知事に幼稚園教育機会を増やすよう通達し、幼稚園が増設されました(汐見稔幸ほか『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史一五〇年』萌文書林、二〇一七年)。足立区でも二十七年に区内で初めて区立関屋幼稚園が開設されましたが、二校目の区立幼稚園

が開設されたのは四五(一九七〇)年でした(「東京都足立区教育委員会編『足立区教育百年のあゆみ』一九八〇年」。その間、区内では五十校の私立幼稚園が開設されており、幼児教育はもっぱら私立によって担われていました。幼稚園不足に取り組むため教育者の藤井氏が開設したのが藤井幼稚園でした。

昭和二十八年の入園者は四十五名でしたが、十年後には園則の定員である一〇〇人にまで増加しています。そのため、開園当初の幼稚園の園舎の面積は四二・三二坪でしたが、入園希望者の増加を理由として昭和三〇(一九六五)年に園舎が八五・三一五坪まで増築されました。

■園舎と設備 増築後の幼稚園には保育室が二部屋、遊戯室・保健室兼事務室兼職員室が一部屋ありました。(図1)職員は園長含め七名で、うち園医と歯科医を除く教員・事務員は全員藤井姓であることから、初期は親族で幼稚園を運営していたことがわかります。入園料は千円で保育料は月額八〇〇円でした。当時の国立大付属幼稚園の保育料金が一八〇〇円で、公務員の初任給が約七六〇〇円だったことを考えると、料金は比較的安かったと考えられます(『値段の明治・大正・昭和風俗史』朝日新聞社、一九八七年)。

備品台帳によると、開園当初の備品としてオルガン・電気蓄音機・レコードプレーヤー・園児用机(二十

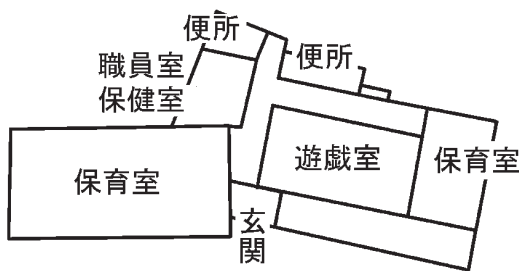


図1 藤井幼稚園図面



写真2 園舎（2023年11月1日撮影）

四脚）・園児用腰掛（一二〇脚）・整理棚（三台）・下駄箱（三台）・整理箱（一三〇箱）・綱引ロープ・紅白玉入れなどが購入されています。また、町の婦人会などからレコードやハンドベルも提供されており、幼稚園の設立が町の人からも期待されていた様子がうかがえます。遊具は安全ブランコと滑り台があり、翌二十九年にタイコ橋・ジャンゲルジム・鉄棒が新たに設置されました。

町、千住関屋町には別の幼稚園があったため、千住の南部からの利用者は少ない傾向にあります。遠方からの利用者は五〇年代に増加し、六〇年代は平成にかけて二桁の年もありました。交通網の整備や自動車の保有の増加によって遠方でも幼稚園を選択し、利用できるようになったと考えられます。

■教員日誌 資料のなかには昭和五四～六〇年に教員によって記された日誌があります。日誌は一ページにつき一週間が割り当てられており、その週の学習のねらいや一日における教育内容が箇条書きで書かれています。

週(5/26～5/31)		ねらい 遠足に喜んで参加する 動物に興味を持つ				
6日)	火(27日)	水(27日)	木(28日)	金(30日)	土(31日)	
表 らの前 な声で	持ち帰り製作 「ちょう」 切りぬき仕上 げ※仕上がっ たものをへや にかざる えんそくの諸 注意 うた「はをみ がきましょ う」	上 野 動物園 赤組 遠足	休 園	印象画 「えんそく」 ※遠足につい てはなし合う ※自分が見た動 物についてはな し合う ※動物をかく うた 「はをみがき ましょう」	折紙 「ペンギン」 ※きちんと折 る くちばし折 りの練習 ※おなか・く ちばしなどを ぬる うた 「はをみがき ましょう」	
び ひか によみ いです	はさみ のり					

図2 昭和55年の日誌の内容(一部) * 4月の新年度より8週目

教育内容としては、絵画や手技(折り紙など)、字の練習などがおこなわれていました。また、園児が自らの経験を話す生活発表という教育もおこなわれていました。毎年五月には上野動物園へ遠足に行き、十月には野田市の清水公園へ芋掘りに行っていました。

■おわりに 藤井幼稚園の資料からは戦後の藤井幼稚園の設立・経営の過程がみえてきました。とくに、幼児の教育施設が不足していた戦後から高度経済成長期において、地域の幼児教育に重要な役割を果たしました。また、他の資料の分析と比較によって、幼児教育史研究を深めることができる貴重な資料です。

(郷土博物館専門員)

村越向栄と遠藤清子

—琳派の画家と—

『青踏』の文筆家との師弟関係—

小林 優

郷土博物館では、千住を拠点に活動した琳派の画家、村越其栄・向栄父子の調査が続けています。この中で、大正時代に刊行された新聞記事に、当時における女性の権利向上運動にも大きく貢献した文筆家、遠藤清子（一八八二～一九二〇）が、千住近隣に暮らしていた折に向栄（一八四〇～一九一四）に画の指導を受けていたことを窺わせる記述があることが新たに確認されました。これは、向栄が地域における画法の教授者でもあったことを物語る貴重な事例となります。

■『青踏』の文筆家、遠藤清子 遠藤清子は、平塚らいてうが創刊した女性による文芸雑誌『青踏』（明治四十四年創刊）に最初から参加し、同誌の参加者と共に女性の権利向上運動の中心として活動したことで知られます。

東京高輪に生まれ、長じて東京府小学校尋常科准教員の免許を取得して、明治三十七年（一九〇四）まで東京の数か所で教員を勤めます。その後は記者として働きながら女性の政治的権利の獲得に向けた運動に参加し、この間に小説家の岩野泡鳴と内縁の関係になり、続いて参加した『青踏』では「岩野清子」の名で小

説や論文を寄せています。この後、清子は泡鳴と婚姻生活を送りますが、やがて泡鳴の不貞により別離に至り、以降は生涯を通じ女性の権利向上運動に力を注ぎました。

一方で向栄は、千住河原町で寺子屋を運営するかたわら画家として活動した父、其栄から寺子屋と琳派の画法を受け継ぎ、江戸・明治の千住で教育者・画家として活動した人物です。近隣の家々を飾る掛軸や屏風の制作を多く手がけつつ、明治二十八年（一八九五）まで寺子屋（明治六年以降は私立村越小学）の経営を行い、千住の人々による様々な文化活動の中心にもなりました。

■清子と向栄の師弟関係 遠藤清子が向栄に画を学んでいたことを示すのが、巢鴨村字宮仲（現豊島区大塚駅近辺）の清子・泡鳴夫妻宅を訪ね、その書齋を紹介した大正三年（一九一四）五月二十七日の読売新聞記事「新意匠の書架 泡鳴氏の書齋」です。この記事中に、次のような一文があります。

「氏の書齋にエビスビールの空箱に一つはい書籍がつまつて居る。その新意匠の書架に對する油繪は亡くなつた氏の母堂の肖像である。應接間に行くと大きな二枚屏風に光琳派の楸（ひさぎ）と櫨（はぜ）との繪が書いてある。これは夫人の師の村越樸氏の筆で、その他に故青木繁の繪が二つ（後略）」

※太字・括弧内は筆者。

すなわち、清子・泡鳴夫妻の家の応接には清子の師である村越樸（樸は向栄の実名）の筆による二曲屏風が飾られていると記されており、ここで向栄と清子の師弟関係が示されているのです。

清子が学校教育を受けていたのは当時の神田区であり、千住の教育者であつた向栄と教育上の師弟であつた可能性は考え難い。すなわち、記事中で記されている「夫人（清子）の師」という文言は、向栄のもう一つの生業である絵画における師弟であることを示すものと考えられるのです。

では清子は、どの段階で向栄から画法の指導を受けていたのか、それは清子が学校教員をしていた時期であると考えられます。

清子が准教員免許を得たのは明治三十一年（二八九八）年で、以降、北多摩郡谷保村（現国立市）と神田区の尋常小学校での勤務を経て、同三十三年に南足立郡花畑小学校に着任しました。これと前後して、清子と家族は南葛飾郡南綾瀬村小菅に転居し、教員を辞するまでの四年間をこの地で過ごしています。荒川放水路が開削されていない当時、綾瀬川を挟みつつも千住と清子の居宅の距離感は近く、具体的な経緯こそ未詳ながら、清子は明治三十三～三十七年（数え十九～二十三歳）のどこかで近接する千住の画家であつた向栄に画法の教えを受けていたものと考えられるのです。

その後、清子が特に画家としての道を志向していない点を鑑みると、向栄と清子の師弟関係は、本格的に画家を目指すためのものではなく、教養として画法を学ぶという方向性のものであつたと推察されます。とは言え、この期間に向栄と清子には師弟として確かな繋がりが築かれたものと見え、自身の居宅に向栄の屏風を飾っていたという前述の記事は、それを如実に物語るものと言えるでしょう。

向栄が画家として後進へ画法の指導をしていたという痕跡はこれまでほとんど確認されておらず、現段階では図案家の岸光景が琳派の画風を後に継承させるため、若手画家を向栄に入門させたという記録（『美術新報』第五卷第十五号、明治三十九年十月刊）が残るのみです。これに対し、今回確認された清子との師弟関係は、向栄と清子との繋がりを示すだけでなく、向栄が広く門戸を開いて、近隣子女への画法指導を行う環境も持っていたという、向栄の未だ知られざる活動の一端を物語るものとなるのです。

（郷土博物館 学芸員）

参考文献

尾形明子『自らを欺かず 泡鳴と清子の愛』（筑摩書房、二〇〇一年）
らいてう研究会編『『青踏』人物事典 110人の群像』（大修館書店、二〇〇一年）

溜井ためい―川をつかった平地のダム―

足立区周辺の河川は、江戸湾（東京湾）の潮の満ち引きが影響する河川感潮域です。海から潮が入るので区内の橋にたつと海の香りを体感できるときがあります。いっぽうで農業用水としての利用は厳しく、真水の確保に苦労しました。江戸時代の新田開発で数多くの水田ができる

と水供給する面積が拡大しました。

そこで足立区や周辺では「溜井」という川をせき止めた平地のダムを水源とする工夫が行われました。

左の写真は現在「圀川」（がけがわ）の風景ですが溜井（川を利用した平地のダム）となった歴史を持っています。

■新旧二つの最下流部 圀川はもと

は綾瀬川の自然流路の最下流部で、六木の地先で中川に合流していました。しかし寛永年間（一六二四～四四）に現在の内匠橋から南にのびる綾瀬川の直線流路が開削され、川筋は二つになります。このまっすぐな綾瀬川は「綾瀬新川」もしくは「新川」と称されました。

その後、延宝八年（一六八〇）には綾瀬川の流水を新川にしっかりと流すために、現在の内匠橋付近で、旧流路（現圀川）との接続を締め切ります。翌年には綾瀬川藻刈組合が成立して流路を流域の村々全体で守っていく取り決めが行われました（『草加市史』）。いっぽうで圀川の下流側で合流する中川も早く慶長年間

（一五九六～一六一五）に溜井となっており新川との締切後、圀川はその一部となりました。

しかし享保十四年（一七二九）に、葛西用水を再整備するため中川との合流点でも締め切りが行われ、綾瀬川と中川との接続点には水門が設けられ、葛西用水とともに重要な水源となり、古文書や絵図で「久左衛門新田小溜井」「古綾瀬川溜井」とされ、長く用いられました。

■川を利用した溜井 こうした溜井は各地に作られました。もとの古利根川流路の小合溜井葛飾区。現水元公園、元荒川を利用した瓦曽根溜井（越谷市）、芝川を締め切った見沼溜井などが知られています。

溜井水源の灌漑は、利根川流路の改編にともない主として享保年間（一七一六～三六）に利根川を水源とする長距離用水へと主役が交代します。圀川と交差する葛西用水もその一つで、旧河道や用水網を転用して成立しました。葛西用水と見沼代用水、明治用水（愛知県）は日本三大農業用水として知られています。が「世界かんがい施設遺産」にもなっています。その成立に深くかわる溜井もその遺産を構成する重要な要素でしょう。

現在、葛西用水桜通りを北に向か



い八潮駅に向かうと「ふれあい桜橋」で圀川を渡ります。また瓦曽根溜井から流下してくる葛西用水も橋のすぐ西側にあります。

右の写真は平成十八年（二〇〇五）の開通時の写真です（郷土博物館「あだちの今を記録する」収集写真 滝沢慎吉氏撮影）。この橋の周辺は先人たちが溜井灌漑と長距離用水による灌漑へと試行錯誤しながら、足立の平野部を発展させた歴史を体感できる場所です。機会をみて現地での見学をお勧めします。

